

味・爽抄

了然尼のこ

と
し
や

一女人が美貌のために尼になることを阻まれ、自らその顔を烙いて志を遂げたと云ふ話は、近世期の隨筆類に散見するもので人のよく知るところである。了然尼と呼ばれるのがその當人で、歌學者戸田茂睡と交游があつたらしく、彼の「紫の一本」に見える記述はその古きに屬するものであらう。

此の鐵砲洲に了然と云ふ尼住めり。これは東福門院に召使はれし女房なるが、女院かくれ給ひて後、尼となり。了然と名を付けて五山の出家を師として禪學をつとめ、吾妻に下りて鐵牛和尚に法を聞かんとす。然れども容貌美麗にしてそのかたち雅やかなるに付て、鐵

牛寺門の出入をとゞむ、望叶はず江戸に下り、木庵禪師の弟子に伯翁和尚の駒込の庵へ行きて在住せん事を望む。伯翁の云、佛法に志あるものは、形の美なるを好まず、尤容儀を整ふる事なし、了然形美なるに、殊に麗しくつくれり。その形にて寺中にあらん事、世人の口にゆるす事あるまじ、さらば在住叶ふべからず、とて寺中を追ふ。了然力なく出で近所の町屋へ入り、しかくの事を云ひて、そこにありける銅の器物を火の中に入れ、その内少し物を案ずるていに見えしが、右の銅の赤く焼けたるを取りて額よりはじめて顔のうちへ押付けて悉く貌を損ぎして、さて筆をとりて

燎面皮頰

昔遊宮裏燒蘭麝 今入禪林燎面皮

四序流行亦如此 不知誰是箇中移

歌に

いける身を捨て、焼く身のうからまし

終の薪と思はざりせば

茂睡は更に、了然が江戸から鎌倉に移る時、彼女はかねて書き留めておいた茂睡一派の人々の歌の集を置土産として託した旨を誌して、その歌を列擧してゐる。この「紫の一本」の文中に見える遺佚と云ふのは茂睡の事で、その別號である。

この記述がどの程度に眞實性を有するか知らないが、五山の僧に比べて、鐵牛とか伯翁とか云ふ和尚は禪坊主のくせに、いやに拘泥してゐる生臭だとの感が深い。美貌之尼作麼生と反問したい。殊に伯翁の前に現はれた彼女が粉粧して一段と麗人ぶりを發揮してゐたのはむしろ面白い。それが急に面皮を烙ぐに至る徑路はかの行文では表面的事實以外に觀觀を許さない。その心的推移には

かなり複雑な経緯が介在してゐるに相違ないと思はれる。しかし世人の感興は「美貌烙印」の一事項にのみ懸つてゐるらしい。

次に談林の俳人岡西惟中は「一時隨筆」で、この事件に關してあつさりと敘してゐる。

いつの年にかありけむ。年の頃廿ばかりの女房のある禪林に入つて、出家遂げん事を望みしに、和尚あまた度否ければ、此女何にとか思ひけん。傍に立ちかくれ、自ら面をやき偏へに道心の志をあらはし、かく詩歌を綴りぬと聞し……

とて前記の詩と歌とを擧げ、更にその歌が木下長嘯子の「いける日の宿の烟ぞまづ絶ゆるつめの薪の身は残れとる」の歌に所縁する旨を述べてゐる。

降つて天明朝の人、百井塘雨の「笈突隨筆」卷十二を見ると、かなり詳細になつてゐる。

東武江戸鐵砲洲に了然尼といふ尼僧侍り。京師葛山氏の女にして、東福門院に召仕はれて名を宿り木と號す、女院かくれ給ひて後、家に歸り住む。爰に人ありて媒

する故、父母諾して娘に婚を勸む。女の曰、子供三人人持なば夫殿を呉てんやと約して松田某と云ふ醫師へ嫁しけり。果して二十四五歳頃までに男女三人の子を持てり。則ち夫に殿を頼ひ、目前に髪を下して尼となり、五山の俗に付て禪學を勤めけり。關東へ下り、鐵牛和尚に法を問んとするに、容顔美麗なりしがば寺門の出入を止めらる。依て木庵禪師の弟子伯翁道泰和尚が駒込の庵室を尋ねて法を受けん事を乞ふ。是も艶色のうるはしきを厭ひて、ゆるさざりしかば、力なく立出で町家へ休らひ、銅器を火中に入れ赤く焼けたるを追取て、我額より顔へ押しあてしかば、何かは以てたまるべき。皮肉焦爛れて目もあてられざるに、則ち筆を執りて

詩・歌（前記に同じ、故に略す）

後に鐵砲洲に草庵を結び、隠れ家の茂睡註、略）及び遺佚などに和歌を以て交り、晩年には牛込高田落合泰雲寺の寺主と成り、泰雲了然元總大和尚と稱す。長壽にして正徳元年辛卯九月十八日寂す。

了然尼のごと

此の記録はあまり、索性が明確に誌してあるので、却つてその所據の指示が望ましい。而して「紫の一本」の觸れなかつた婚嫁の一條が見えるが、凡そこんな結婚條件なるものがあるだらうか。了然と云ふ女人が異常な性格の持主であつたとしなれば理解に苦しむ底のものを發見する。

了然尼に關しては、よく「新著聞集（第五、崇行稿）」が引用せられるが、その内容は「笈埃隨筆」と殆んど同一で、しかも記述は、この方がむしろ簡略である。たゞ「天和元年の冬、徧參のためにとて江戸に下り、井上大和守殿の屋敷にありし白翁和尚」とあり、又、爛れたる疵頓て癒えて、少しも痕つかざりしも、亦奇特の事なり」とあるだけは目新しい。

その他、變つた記録は「松屋叢話」（文化十一年刊、小山田與清）である。

尾張國名古屋の人三田茂左衛門が妻は井上氏の女なりけり。尼の了然と佛の道の物語せし時に詠みける
うた

常に行く道ならばこそ世をうみの蜚の舟にもりて渡らぬ

此の了然も、同じ國人にて植山十藏といへる儒臣の母なり。夫におくれし時、容貌の美麗かりければ、けさうする人もぞあるとて、額に二ところ焼銭して、そのさまを損なひ、やがて尼にはなりたる也。とも正徳年中の人にぞありける。

夫に死別した後、佛門に入つたと云ふ方が、當初から三人子を生んだならばと豫約するのよりは、遙かに自然的であり、人柄も立ち優つて享けとられる。

猶「鹽尻」や「柳庵隨筆」にも記事が見えるが、大同小異であるから引用の煩を避ける。

以上の如き文獻はその記述の相異によつて、了然尼その人に對する批判に、差別相を興へるが、それと共に、依つて生ずるかなりの示唆を放下してゐると思ふ。近世日本は形式化せられた佛敎の隆昌期であり、概念的な儒敎精神の昂揚期であつた。かうした時代の風尙が、了然尼に關する逸話にも反映してゐないだらうか。即ち、人

間」としての了然尼の眞實性を凝視する前に、この時代的雰圍氣が一抹の陰影となつて本然の姿を翳らせる。そこで、了然の眞の様相は把握し難いものとなつて、徒らに主觀的判断だけが、獨りよがりの面貌を見せびらかすのである。多くの隨筆類が大同小異であると同時に、筆者の小我を、ちらつかせてゐるのはこれがためである。——私もここで小我を曝らすやうな眞似は差し控へたいと思ふ。

一、安積沼(享和三年) 山東京傳

この作の卷二、第四條で山井波門が復仇の旅に出る前わが家の軒に雨宿りする尼を見て、招じ入れる場面がある。

此尼の容貌を見るに年の頃は三十路に餘りて、盛は少し過ぎぬれども生得たる風流の姿、玉貌妖嬈として自然の美艶なること、睛を奪ふばかりなり。只惜しむら

くは額のほこり頬のかたはらに燒爛れたる痕あり、恰も白玉にひびの入りたるが如し。波門しばし頭を傾けけるが、良ありて尼公は了然禪尼にてはおはさずやといふ……

それから、了然は波門の未來を相し、空陵避醒香と稱する靈香を與へて去る。京傳は更に了然の事蹟を書き加へてゐるが、それは全く「笈埃隨筆」の記事を殆んど引用したものである。但「此の事、紫の一本、一時隨筆、望海每談、新著聞集等に記して詳し」と添書して、眞の典據書目を逸してゐるのは戯作者の常套手段でもあらうか。

二 石言遺響(文化二年刊) 曲亭馬琴

南朝忠臣藤原俊基卿の遺女月小夜姫が、鑄鐘の起願を果さんために尼にならうして峰の寺(遠江)に赴いたが、老僧はその美貌のために許さない。本書の第三卷に見える。

彼僧の云ひへらく、未だ若き御身にて遁世の事思ひ立ち給ふるは頼もしく候、元より成道は顔色の善惡によ

らずと雖も、かく嬋妍なる女房を誰かは弟子とし教育すべき、且佛門に入る徒は恩愛戀慕の羈を斷ち、家を離れ兒を棄て、無爲境界に苦行して年を積めるを樂しみとする云々。

とて、年四十をも過て後、薙染の身ともなり給へ」と峰寺の和尚は説いてゐる。月小夜は顔を燒くの行動に出でず、歸途「傍なる草舎の中に走り入りて菜刀とりもあへず翠の黒髪ふつと切拂ひ、和衣の袖を引裂きつゝ何やらんする／＼と書詠りて髻を引包み、しか／＼の人尋ね來らばこれを遞與給はるべし」と言ひ置いて勸進の旅に上る事になつてゐる。即ち了然尼の事蹟の一半が面影として反映してゐるのである。

三 占夢南柯後記(文化八年) 曲亭馬琴

「三七全傳南柯夢」(文化四年刊)の續篇「占夢南柯後記」の卷七「過去の庵主」の章にも同じ趣向が見える。

赤根半之進の妾園花と、その子平作の妻夏山との姑嫁の兩人が、義のために自刃した平作の初月忌の建夜に尼姿となる。その時の様子を園花が、主筋に當る大内義隆の

姫君の隠れ家で、庵主の尼に物語ふ、

此夕、わが宿所に親族おのゝ集會ひたる、その席上にて夏山は、父と外父まぢぢとに申すやう、出家の事を日頃より願ひ奉れども許し給はず。こは姿が年若ければ行く末心もとなしとて、許されぬにやあらんすらん、心は貌によるものならぬと、又そのよしなきに侍らず。しかりともふかくも思ひ定めしを、いたづらにやは止むべき。これもて疑念を晴れ給へ、と云ひもあへず、爐の火の中へさしくべたる火取の柄をしかと取り、花は根にかへらばかへれ生きながらついの薪と身をばなしにき

と詠じつゝ、烈火の如くに焼けたりける火取を顔へ押しあつれば、烟忽ち發と立ちて一聲苦あなと叫びもあへず、仰げざまに倒れたり。吾儕わがらこの形勢かたちを見て、われも又かゝる志はありながら夏山に先ぜられしは生涯の不覺なれ。後れはせじと火取をかいとり

櫻木をくだけは後の花もなし死出の山風

いざ吹かばふけ

と詠しも果てず火取を顔に果しあてゝ、もろ共に倒れたり。云々

と云ふのである。

京傳の「安積沼」では、了然尼をそのまゝ作中人物となし、出家の事情を解説風に敘述してある。而して浪漫的小説の常套に従つて豫言者めいた超人的風格を附與してある。この素直すちさに對して馬琴は、「石言遺響」では禪僧の拒否を、「南柯後記」では面貌を烙く話を、それゝに配分して、作中人物の行動として採擇してある。素材攝取と云ふ點では、この方が本格的であらうが、たゞ「南柯後記」で二人とした點はむしる執拗に過ぎる。

趣向の巧拙、素材そのもの適否はともかく、了然尼の如き行動が、近世期にあつては「新著聞集」の著者が感激したやうに、崇行たかしと稱すべきヒロイックな態度として肯定し、絶大の讃仰と異常なる魅力とを喚起した事實は、時代思想の風尚の上から留意すべき現象の一と思ふのである。